ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第58号　2019年10月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　高校生による学校資料の調べ学習 ー博物館ワークシートの作成を事例にー	八田 友和	2
逸話と世評で綴る女子教育史（58） ー広島女学院と福岡女学院ー	神辺　靖光	6
中谷宇吉郎が、寺田寅彦先生から聞く青春回顧談 ー五高教師の夏目漱石や田丸卓郎らとの出会い・交流ー	谷本　宗生	11
学校資料の教材化を模索して②　ー絵葉書の活用を事例にー	八田　友和	14
明治後期に興った女子の専門学校（13） 教科書編さんの意図	長本　裕子	19
戦後生徒会活動成立史の研究 ⑤ ー生徒自治会の展開における軍政部の指導(2)ー	猪股　大輝	23
教育史研究のための大学アーカイブズガイド（21） ー国士舘史資料室ー	田中　智子	28
学生寮の時代㉓　ー同郷団体の「学生寮」ー	金澤　冬樹	33
木下広次をめぐる史料（5）　ー「大日本の教育に就て」（1）ー	冨岡　勝	39
「久徴館」発足時の位置と規模	小宮山　道夫	42
体験的文献紹介(6)　ー 漢学塾の調査研究に入る ー	神辺　靖光	46
短評・文献紹介		50
会員消息		51

コラム

高校生による学校資料の調べ学習
―博物館ワークシートの作成を事例に―

八田（はった）　友和（ともかず）
（クラーク記念国際高等学校）

1、はじめに

『ニューズレター』第53号で触ふれたように、2002（平成14）年から2018（平成29）年までに7583の学校が廃校となった[1)]。それに伴い，学校が所蔵する資料（以下，学校資料）が散逸と廃棄の危機にさらされている。それら資料のうち、博物館に寄贈された学校資料を後世に伝えるためにはどのような工夫が必要であろうか。本稿では、学校資料を対象としたワークシートを作成することを通して、子どもたちに学校資料を知るきっかけを提供するとともに、資料を守り、後世に受け継ぎたいと思う気持ちを醸成することを目指した授業実践を行ったため、その概要を整理する。

2、思い出博物館とは

本研究では、学校資料が寄贈されている博物館の一例として、兵庫県市川町に所在する思い出博物館（以下、（以下、思い出博））を取り上げる。思い出博は、「なつかしカメラ館」「ほのぼの夢蝶館」「昭和なつかし館」の3ブロックで構成されている博物館である。本稿では、このうち「昭和なつかし館」を取り上げる。「昭和なつかし館」は、戦後復興から高度経済成長期の生活資料を中心に展示が構成されている。また学校資料としては、教科書や自由帳、黒板などが展示されている。本実践では、それら資料を事例に高校生が博物館資料を紹介するワークシートの作成を行った。

3、授業実践の概要

授業実践の概要については次の通りである。

(1) 科目名：実践現代社会（通信型コース対象）

(2) 期　間：2019年6月～7月（全6回、週1回実施）

(3) 場　所：クラーク記念国際高等学校 芦屋学習センター

(4) 生徒数：6人

(5) 授業の流れ・方法

本実践は、全6回の授業で構成されている。第1時では、博物館の基本的知識について解説を行い、ワークシートがもつ教育的価値について確認した。続く第2時では、思い出博がもつ資料を子どもたちに提示したうえで、調べる資料の選定を行い、概要をまとめた。そして、第3～5時までは、調べ学習の時間として、子どもたちがパソコンや図書を活用して、ワークシートを作成する時間にあてた。第6時では、ワークシートの校正を行ったうえで印刷を行った。

4、考察

本実践の成果として二点あげることができる。

第一に、授業で使用した学校資料が授業を構成する主要な教材となっただけでなく、子どもたちが調べ学習をする際に学習材としても機能した点である。

第二に、文化財保護の意識を涵養できた点があげられる。授業後、「今回の経験を活かして、もっとわかりやすいワークシートを作成したい」と問題意識をもっている生徒を複数人確認することができた。

5、さいごに

本稿では、勤務校で行った授業実践について概要の整理を行った。なお、本実践では、10枚のワークシートを作成し、全て思い出博に寄贈している。お近くに行かれた際はぜひご覧いただき、ご意見やご感想などお寄せいただければ幸甚である（一例として、作成したワークシートのうち、1枚を末尾に添付している）。

【註】

[1] 詳細は『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて－』第53号に収録されている「学校資料の教材化を模索して－集合写真の活用を事例に－」pp.2-4に記載

【参考文献】

・八田友和2017『物質資料の変遷から社会構造を認識する中学校社会科授業開発』兵庫教育大学大学院学位論文

・八田友和2019「学校資料の教材化を模索して－集合写真の活用を事例に－」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて－』53号pp.2-4

・原田智仁2018『中学校 新学習指導要領 社会の授業づくり』明治図書

・文部科学省2018『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説－社会編－』東洋館出版

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

ワークシートの例

教科書

1、教科書とは

正式には「教科用図書」といい、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校などの学校で教科を教える中心的な教材として使われる児童・生徒用の図書を指します。

2、教科書が使われた時代とは？

この教科書は、1901（明治 34）年の訂正再版印刷されたものです。明治の出来事としては、1869（明治 2）年に東京に遷都があり、1871（明治 4）年に郵便制度開始が開始されました。1889（明治 22）年に大日本帝国憲法の発布。1890（明治 23）年に第 1 回衆院議員総選挙・第 1 回帝国議会の開催などが起こりました。

3、教科書の価格

明治時代より前の江戸時代までの教科書は、「往来物」と呼ばれてました。なぜ、「往来物」呼ばれるようになったかと言うと江戸時代の教科書は手紙文の手本を集めた形式のものが多かったためだそうです。

現在、義務教育の教科書は完全無償ですがこの無償化が始まったのは 1871（昭和 4 年）からで、それまでは教科書を購入する必要があったため 1 冊の教科書を大切に大勢で使用していたそうです。

戦後すぐは、新しい教科書を作る時間や材料に余裕がなかったので、戦争中に使っていた教科書の内容の部分を墨で消した墨入り教科書を使用していたそう

4、まとめ

今回初めて明治・大正・昭和の教科書に触れました。私が使っている教科書とはまったく違い今回調べた教科書は、人物について詳しく書いてあり私は歴史部に興味を持ちました。現在の教科書には書いていないようなことも書いてあり、とても面白かったです。「教科書の秘密」では、私自身が調べるまでは知らなかった教科書の歴史を知ることが出来たのでとてもいい機会になりました。明治・大正・昭和の教科書は古いものなので少しでも力をいれると破れてしまいそうでした。しかし、博物館に展示・保管がしてある教科書は紙の色が黄ばんでいるだけでとても綺麗な状態でした。その教科書を使っていた人が、その教科書をとても大切に使っていたんだなと思いました。

今回、昔の教科書に触れ調べることで歴史について知る楽しさを知ることが出来てほんとに良かったです。

5、参考文献

・『思い出博物館常設展示図録-昭和なつかし館』
・東由梨　2015 年「くらしのうつりかわり展」明石市立文化博物館
・-日本史資料館(2019 年 6 月 5 日アクセス)
https：//history.　gontawan.com／nenpyo-meiji.html
・中高生のための幕末-明治の日本歴史事典(2019 年 6 月 5 日アクセス)
https：//www.kodomo.go.jp//yareki
・明治期の小学校と教科-久喜市公文書館(2019 年 6 月 5 日アクセス)
zuroku12.pdf.

このワークシートは、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパスの木下花菜さんが作成しました。

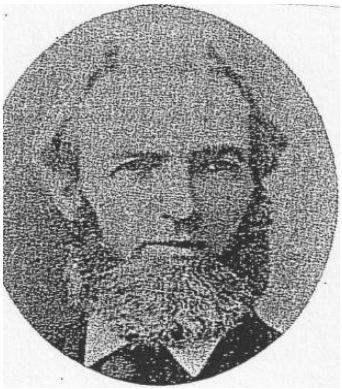
逸話と世評で綴る女子教育史（58）
―広島女学院と福岡女学院―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

広島女学院は砂本貞吉という一人の男とアメリカ南メソジスト教会の運命的な出会いが生んだ女学校である。

創立者　砂本貞吉

広島の人・砂本貞吉は航海術を身につけようと海路ロンドンに向かった。ところが船中であるトラブルに巻き込まれ転換してサンフランシスコで下船した。彼はそこでキリスト教に接し居ること6年にして洗礼を受け、日本人への伝道を志した。明治19年、帰国した砂本は神戸にアメリカ南メソジスト監督教会の宣教師J・W・ランバスLambuthを尋ねた。この頃、アメリカ南メソジスト監督教会は日本への伝道を志向し、その目標を①琵琶湖周辺、②神戸周辺、③広島周辺の三地方に定めていた。キリスト教を信仰すれば、その人は救われると信じた砂本はまず最愛の母親を救うべく広島伝道を目指した。広島に着いた砂本は鳥屋町の野口旅館に投宿して早速、伝道のための集会を開いた。集ったのは砂本の母と叔父と弟だった。次いで西大工町に家を



J.W.ランバス

借り、階上を英語の学習場とし、階下を聖書を読む所、即ち教会とした。やがて神戸からランバスも来て、ここで英語女学校とキリスト教会活動を一体として行うようになるのである。

広島は瀬戸内海航路の要衝にあり、人々が海外に目を向けるので外国語学習熱が早くからあった。明治7年、官立広島英語学校が開かれたのも故なしとしない。この学校は明治10年に県立広島中学校に引き継がれたが、女子の英語学校にまでは及ばなかった。しかるに明治17年、木原適処なる者が私立広島英語学校を開き、翌18年、附属女学校を始めたのである。木原は広島の農民の生れで西洋砲術を習い農民兵を率いて戊辰戦争で戦った人物である。また明治20年1月には広島の医師の娘で大阪の梅花女学校を卒業した杉江田鶴(たず)が広島に帰って女学校を開くという記事が「芸備日報」に出た。数年、アメリカを見聞きした砂本貞吉も女学校のことが頭にあったのだろう。杉江田鶴を主任として、その家塾と木原適処の附属女学校を合併する形で広島英和女学校を創立したのである。

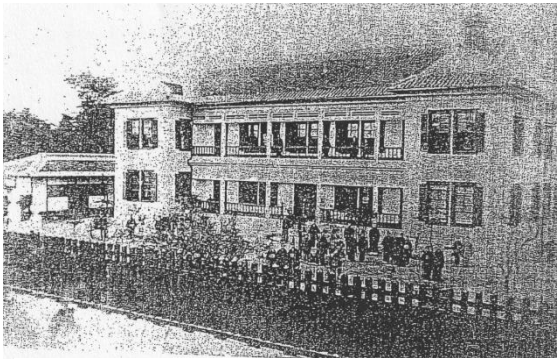
日本に女学校をたて、日本の女性を啓蒙しキリスト教の福音を拡めるのはランバスが属するアメリカ南メソジスト監督教会の使命であった。同教会は広島英和女学校の教師にN.B.ゲーンズを送り込んできた。明治20年10月23日の「芸備日報」は「教師招聘」として「細工町・英和女学校には今度米国婦人ゲーン女教師を聘し英語学及洋服裁縫を教授するよしなり」と記している。南メソジスト監督教会の求めに応じたゲーンズはケンタッキー州の生まれ、フロリダカンファレンスカレッジの教師をしていたが、日本で

初代校長　N.B.ゲーンズ

の女子教育に心をときめかせて応募した。明治20年10月、彼女はランバスとともに広島に到着し英和女学校の主任教師になった。11月26日の『芸備新聞』は「細工町にある女学校は先頃米国女教師を聘してより日増に生徒が増加」と書いている。この頃より英和女学校はさかんになっていったのであろう。

しかるにそれから一年数カ月後、事態は変った。22年春になると“生徒が仏教主義の女学校に引き抜かれたので閉校する”の噂がたった。この時期、全国的にキリスト教徒が仏教徒の攻撃を受けていたし、広島には国泰寺村に私立山中高等女学校ができたから女生徒がそこに集ったという事情はあったろう。しかし英和女学校は閉鎖に向ったのではなく新たな再建に向けて動き出したのである。それは校舎の建設であった。

細工町の校舎は元私塾で二階は法律の教室、階下は柔剣道場であったものを二階・女学校、階下・教会に直したのであった。近代的な女学校とは言えない。ゲーンズは英和女学校を一たん閉鎖して新たな土地に新校舎をたてるべく南メソジスト監督教会に働きかけた。22年11月、紙屋町に90余坪の土地を購入、23年2月起工し同年7月、校舎が落成した。土地建物の総額1,170円、その多くは南メソジスト監督教会からの献金と借入である。新校舎竣工を機に体制を新しくして、ゲーンズが校長になり、教則を整えて本科2年普通科4年の6年制女学校になった。一時は13名にまで減った生徒も24年には60名を超え



火災後再建の校舎　明治25年

前途洋々にみえた。しかし好事魔多しという。24年10月15日、校舎から火が出て翌朝まで燃え続け、新校舎は灰燼に帰した。

この奇禍にゲーンズもメソジスト監督協会も素早く対応した。ゲーンズは仮教場を近くの上柳町に設けて授業を続行すると同時にこの危機を監督教会に訴えた。監督協会は直ちに呼応して6,500ドルを目標に再建資金を集めた。かくして明治25年9月、広島英和女学校の再建新校舎が落成し、後代に続いたのである。現広島女学院中学校高等学校で大学・短期大学、幼稚園が併設されている。

明治18年6月12日の『福岡日々新聞』に次の記事がある。

> 谷川氏が校主となり創設する基督（きりすと）普通英和女学校は女教師米国辺西亜洲（べんしるばにや）人ミス・ギールを招聘し本月十五日、福岡呉服町八番地に仮設し英学並びに邦学を教授し、月謝は五銭より五十銭迄にして望みの女子には洋風の諸技芸及びオールガンをも教授する由

谷川氏というのは福岡の呉服町にできた米国メソジスト監督教会の教師ロングが信頼をよせていた日本人牧師・谷川素我（そが）である。この谷川が校主となって米国婦人ギールを教師とする女学校をたてるというのである。当時、福岡には女学校がなかった。そこでまず動いていたのがロングで、彼はすでに女学校を開設している同教会の長崎活水女学校と相談することにした。ところが突然ロングが急病にたおれた

福岡女学院
初代校長　J.M.ギール

ので（彼はまもなく帰国）信頼する谷川牧師にそれを託した。明治17年11月谷川は長崎に趣き、活水女学校の主脳と懇談、福岡にも同教会の女学校をたてることにした。18年4月、長崎在住のギール宣教師が活水女学校卒業のバイブルウーマン大島瑳琪（さき）とともに福岡を訪れて懇談、前に掲載した新聞記事通りの英和女学校を福岡にたてることになったのである。18年11月1日の『福岡日々新聞』は言う。

> 福岡英和女子学校、福岡因幡丁三十一番地の同教校は創立日猶浅きと漸々旺盛に赴くの景況なり。其の学科は邦楽　英学　画楽　音楽　裁縫学　織法　編法　縫箔（ぬいはく）法　料理法の数学科にして其教員は米国人センニキーレ夫人、白水璞　井上マサ　山賀チヨ　上森サキ　渋屋ハルの人々なり。

米国人センニキーレ夫人はゼニーギール夫人の誤りである。ギール夫人はペンシルバニアの師範学校卒業後、その地の公立学校で教え、メソジストの伝道教会から派遣されて長崎の活水女学校の教師となった。そして如上の経緯をへて福岡英和女学校の校長になったのである。開校時の学科課程はよくわからない。邦学科初等中等高等全5級とさらに高級の英学科を置いたらしい。授業料も学科履修別で、英学・邦学・音楽・裁縫の全科を履修する者は月謝50銭だが、和学と裁縫履修者は5銭、その他、学科履修によって授業料はまちまちである。

この学校は以後、徐々に発展していった。現福岡女学院中学高等学校である。

参考文献　『広島女学院百年史』
『目でみる広島女学院の100年』
『福岡女学院百年史』
徳永徹『凛として花一輪・福岡女学院ものがたり』

中谷宇吉郎が、寺田寅彦先生から聞く青春回顧談
―五高教師の夏目漱石や田丸卓郎らとの出会い・交流―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

科学者である中谷宇吉郎（1900～1962年）が、師の寺田寅彦（1878～1935年）先生から聞いた、寺田が五高生時代の青春回顧談は、だいたい次のようなものである。

寺田は「高等学校は五高だったが、五高にもよい先生が沢山おられたものだった。夏目先生に英語を教わり、田丸先生に三角を教わったものだ。田丸先生に教わると三角が生きて来るのだから妙だ。数学は子供の時から嫌いだったのが、あの時初めて面白いと思った。それまで二部の工科だったのを、田丸先生の感化で到頭三年の時理科に変わってしまったんだ」（中谷「落第」1936～1938年）と、中谷に証言している。

続けて、漱石との出会いについても「高等学校の時に、同郷の豪傑の友人の点数を貰いに行ったのが初まりさ。ちょうどその時先生は俳句をやる学生と話をしておられた。僕が俳句ってどんなものですかと聞いたら、その時非常に要領のいい説明をされたので、感心して、直ぐ馬鹿なことを聞いたものさ。理科なんかやっているものにも出来ますかという質問なんだから。ところが先生はそんな問いにでも実に丁寧に『俳句は職業とか専門とか境遇とかには係らず、やれる人は初めからやれるし、やれない人は一生やってもやれぬものだ』ということを説明して聞かされたものだった。それで『僕はやれそうですか』と聞いたら、まあ見たところやれそうだとのことで、大いに元気を得て、暑中休暇に国へ帰ってる間に沢山作って先生の所へ持って行ったものだ。先生は一々それを見て○をつけて下さったりしたもので益々得意になって、毎週のように持って行ったものだ」（中谷「冬彦夜話」1937年）と語っている。

寺田にとって、五高教師をつとめていた夏目漱石（1867～1916年）や田丸卓郎（1872～1932年）らとの出会い・交流によって、人生の大きな転機を迎えたのだといえるだろう。後年、寺田は五高生時代に田丸が教えてくれた物理について、「高等学校における田丸先生の物理も実に理想的の名講義であったと思う。後に理科大学物理学科の課目として教わったものが『物理学』だとすると、その基礎になるべき『物理そのもの』とでもいったようなものを、高等学校在学中に田丸先生からみっしり教わったというような気がする。この時に教わったものが、今日に至るまで実に頭にしみ込み実によく役に立ち、そうしていつでも自分の中で生きてはたらいているのを感ずる。高等学校の物理は実にだいじだと思う」（寺田「田丸先生の追憶」1932年）と率直に述べている。

さらに中谷は、師である寺田から物理学の在り方などについて、「どうも日本人はあまり夢を持っていなくていけない。それだから何時まで経っても、外国人の跡ばかり追っているのだ。『何々効果』というようなものが発見されると、それのディテイルを細かく精密にやる人はいくらでもいるが、そしてそれも大事なことではあるが、肝心の本当に新しい事実を発見するようなことを試みる人が少ない。…何もかも説明出来てしまうような気持ちを皆に持たせてしまってはいけないね。電子のことも水素核のことも分かり、光も全波長のものが分かってしまったら、もう自然界にはそれ以上かくされたものが無くなってしまったような気になるのが一番いけない」と問題指摘される。

その要因について、寺田は「僕はファラデイのような物理学を想像して学校へはいったのだが、失望したね。物理なんかちっとも教わりやしない。まるで数学ばかり教わったんだ。…数学は物理の研究には無くてはならぬ精鋭な武器なんだが、どんな良い薬だって、余り使い過ぎると中毒するものだから、僕はその中毒のことを云っているのだ。…数学がこんなに幅をきかすというのは、要するに学校

教育というものがいけないのだと僕は思っている。今の学校教育というものは、余り組織立てることばかりに一所懸命になるから、こんなことになってしまうんだ。教育は何と云っても昔の塾教育に限るようだね」(中谷「物理学序説」1936～1938年)と糾弾し、自身の持論を主張している。たとえば、寺田は中谷らに対して、「閑があったら、大家のものでごく通俗なもので、知り抜いていることを書いた本も読んだ方が良い。そんなものを読んでいる間には、自分の頭に余裕があるから、きっと何かのヒントを得るものだ。特に実験を一所懸命やっている時に、そんな本を読むと、非常に大切なヒントを得ることがよくあるよ。その意味で、あまり実験ばかりやらないで、時々はうんと遊び給え。高い山へでも登ったり、温泉にでも浸っている間に、ふっとまるで飛んでも無い新しいアイディアを得ることがあるから。よく今の若い者は遊んでばかりいて困ると云われる先生もあるが、僕は、どうも今の若い者は勉強ばかりしていていかんと云いたいね」(中谷「本」1936～1938年)と、示唆に富む寺田流の発破をかけている。寺田が若き時分に、漱石や田丸らと出会って学び得た教訓などを、自身の体験談を加味した青春回顧談として、こんどは後進学徒である中谷らに伝えてゆこうとしている。聞く中谷にとってみれば、夏目漱石や田丸卓郎らは寺田寅彦の師であり、若き寺田を教え導いた偉大なる存在と認識したことであろう。

なお、五高生であった寺田寅彦と夏目漱石、田丸卓郎らとの関係については、「青年寺田寅彦とヴァイオリンのかかわりについて」『現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第6号(2015年6月、7～11頁)も参照されたい。
https://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/NL/gen-dai-kyou-ken-nl_06.pdf

学校資料の教材化を模索して②
－絵葉書の活用を事例に－

八田（はった） 友和（ともかず）（クラーク記念国際高等学校）

1,はじめに

2018（平成30）年に文部科学省が告示した『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説（以下,『新指導要領－地歴編－』）』の日本史研究の“内容の取扱い”において,「歴史資料や遺構の保存・保全などの努力が図られていることに気付くようにすること」を通して,文化財保護への関心を高め,地域の文化遺産を尊重する態度を養うことが求められた。[1)]

それを受け本稿では,“姫路城の絵葉書”を事例に,歴史資料がどのように保存・保全されてきたかを学習することで,文化財保護への関心を高め,文化遺産を尊重する態度を涵養する授業モデルを開発し,実践した。

2,日本史探究の性格

『新指導要領－地歴編－』において,日本史探究の目標は次のように設定されている。

> 社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ,課題を追究したり解決したりする活動を通して,広い視野に立ち,グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。[2)]

“社会的事象の歴史的な見方・考え方”については,「社会的事象を,時期,推移などに着目して捉え,類似や差異などを明確にし,事

象同士を因果関係などで関連付けて」働かせる際の「視点や方法(考え方)」である」と整理された。ここでいう“視点”については,『新指導要領－地歴編－』において次のように整理されている。[3)]

時系列に関わる視点	…時期,年代,時代
諸事象の推移に関わる視点	…展開,変化,継続
諸事象の比較に関わる視点	…類似,差異,多様性,地域性
事象相互のつながりに関わる視点	…背景,原因,結果,影響,関係性

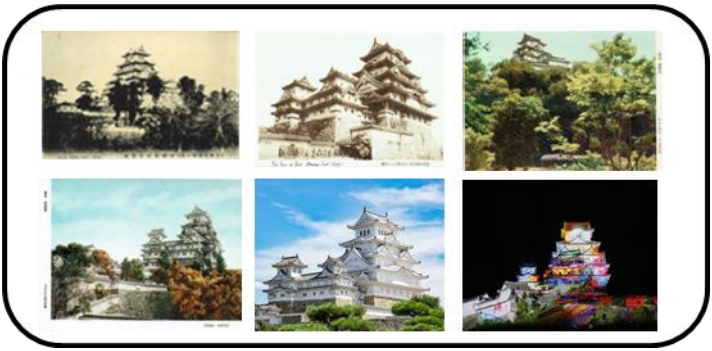
本研究では,これら視点に着目し,歴史資料がどのように保存･保全されてきたか学習することを通して,文化財保護への関心を高め,文化遺産を尊重する態度を涵養する授業開発を目指した。

3,絵葉書の教材化

学校資料としての絵葉書は,「校舎の竣工記念や学校の周年行事記念で学校が発行したもの」「観光地を紹介した市販のもの」「道路の開通など出来事を記録した市販のもの」の3種類に大別でき,学校によって所有する数は異なるものの,膨大な数を保有しているケースが多々ある。これらの資料を活用する方法として,例えば,同じ文化遺産を取り扱った絵葉書を時系列に並び替えさせる活動を授業に組み込むことが想定される。具体例として,姫路城とその周辺環境を扱った絵葉書を取り上げる。これらの資料を時系列に並び替えさせる活動を組み込むことで,姫路城とその周辺環境の変遷から,姫路市や市民団体などが行ってきた文化財保護や環境整備の取り組みについて読み取ることができるのではないだろうか。具体的な授業の流れを以下に示す。

導入：兵庫県の主要な観光地について問い，既有知識を確認する。
本時は，姫路城を事例に扱うことを伝える。

展開①　複数の絵葉書を時系列に並び替えることで，姫路城の推移を確認する。



展開②　共通点と差異を抽出する。
・時代とともに整備されていくことに気付かせる。

○「なぜ，姫路城とその周辺環境は時代を経るにつれ整備されていくのだろう」を設定し，調べ学習を進める。

まとめ：習得を目指す知識等について

行政
国 / 県 / 市

＋

市民団体
ボランティア団体

ハード面の取り組み
主体：日本政府 / 兵庫県 / 姫路市など
具体：保全計画の策定 / インフラ整備など

↓ 相互に影響・関係 ↑

ソフト面の取り組み
主体：NPO 法人 / ボランティア団体など
具体：清掃活動 / イベント開催　など
→「自分には何ができるだろう」

4.考察

本研究の成果として,次の二点が挙げられる。

第一に,絵葉書を並び替えることによって,文化遺産とその周辺環境の整備の変遷が視覚的に理解できた点である。文化遺産は,行政や市民団体の不断の努力で保護・保全されており,その推移と変遷は複数枚の絵葉書を並び変えることによって明確になる。子どもたちは,絵葉書を並び替える活動や調べ学習から,姫路城が行政(ハード面)や市民団体・ボランティア団体(ソフト面)など多くの主体によって保護されていることを読み取っている様子であった。

第二に,文化財保護の意識を涵養できた点である。姫路城が整備されていった歴史を視覚的に学習することで,先人たちが行ってきた文化遺産保護の活動について理解を深めることができた。また,調べ学習の際に,「姫路城を後世に伝えるためにどのような工夫が行われているのだろう」と発問することで,姫路城を事例として,文化遺産を後世に伝える工夫についても考察させた。結果として,授業後に身近な文化遺産を事例に「後世に伝えるために何ができるだろう」という問題提起をしている生徒が複数人見受けられたことにも留意したい。

5,さいごに

本研究では,学校資料を活用した授業構成と方法について,具体的な授業モデルを事例としながら明らかにしてきた。具体的には,姫路城とその周辺環境を撮影した絵葉書を複数枚用意し,時系列に並び替えさせることによって,文化遺産とその環境が整備されていく推移と変遷を視覚的に明らかにすることができた。また,京都大学大学院文学研究科・文学部が「絵葉書コレクション」として,地理学教室所蔵の絵葉書約1500枚をネットで公開しており,これら絵葉

書を補助教材として活用することで,資料の比較・検討が可能になり,子どもたちの「深い学び」にもつながるであろう。今後の展望としては,研究者と教員が立場や職業を架橋した,学際的な研究を推進することで,学校資料のもつ教育的価値を最大限に引き出した教材化を目指したい。

【註】

1)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説－地理歴史編－』p.198より引用

2)前掲書p.192より引用

3)前掲書p.193より引用

【参考文献】

・八田友和2018『物質資料の変遷から社会構造を認識する中学校社会科授業開発』兵庫教育大学大学院学位論文

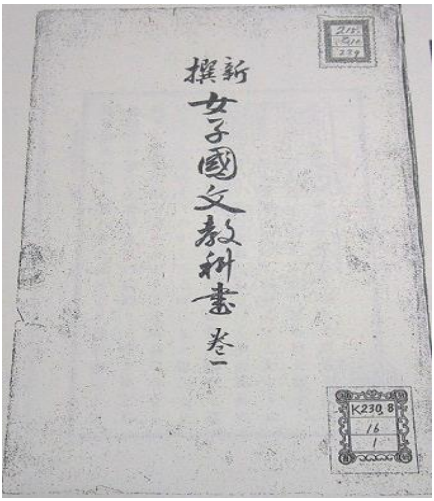
・八田友和2019「学校資料の教材化を模索して－集合写真の活用を事例に－」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて－』53号pp.2-4

・村野正景・和崎光太郎(編)2019『みんなで活かせる!学校資料』京都市学校歴史博物館

・文部科学省2019『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説－地理歴史編－』東洋館出版社

明治後期に興った女子の専門学校（13）
教科書編さんの意図

長本（ながもと）　裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)



下田歌子は、明治35年8月、『新撰女子国文教科書』（写真右・文部科学省教育図書館所蔵）10巻を編さんし、大日本図書株式会社より出版した。

32年2月、文部省は「高等女学令」を公布し、その第13条で「高等女学校ノ教科書ハ文部大臣ノ検定ヲ経タルモノ」と正式に検定制度を打ち出した。実際には28年1月の「高等女学校規程」以後、検定制度下に置かれていた。32年7月、文部大臣樺山資紀は、地方視学官会議において、高等女学校の教育目的は、

> 賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ、故ニ優美高尚ノ気風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト倶ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル学術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス。

と訓示した。日清戦争以降国粋意識の高まりにより、特に高等女学校の修身や国語は、女子教育の最終として、家政を管理し、夫を助け、高い道徳性を持つ女性「賢母良妻」の資性を涵養するという重要な役割の一端を担うことになったのである。

36年3月公布の「高等女学校教授要目」に各学科目の詳細な教授内容が示された。歌子は『新撰女子国文教科書』を訂正再版し、36年11月4日申請、同年11月7日検定に合格した。緒言によると、

“高等女学校及び師範学校女子部等の国文科用に編さんした。1～4巻までは卑近簡易の文で、言文一致体のものも必要とすることから自身の拙文を集めた。5～10巻は、現今及び近世の文、保元・平治以降のわかりやすいものも少し取り入れた。教育勅語の主旨に基づき、女徳を涵養し、智識を啓発し、各種の文体に習熟して、国文を理解し、綴る階梯となることを期待する。”という主旨であった。「教育勅語」の主旨が涵養するように編さんしたことを明示している。実践女学校の設立目的に、「本邦固有の女徳を啓発」し、「賢母良妻を養成する」と掲げているので当然であろう。

具体的には、1、2学年用の1～4巻は、「女生徒の心得べき事」「農業」「年始の文」「刺繍」「みちのくの名所」「住宅の掃除」「料理の心得」など多方面にわたる実用的な文章が並ぶ。人として、女性として母としての心得を歌子自身の文章によって示している。

5、6巻は、細川潤二郎の「皇后陛下御盛徳の一端」、三輪田真佐子の「婦人の慈悲」、福澤諭吉の「国の装飾」、「貞節能く夫の難病を救ふ」(『婦女鑑』)など近現代の文人や教育者の文章で構成している。上級学年用の7巻以上になると、本居宣長や新井白石といった近世の学者の文章、10巻には『平家物語』や『増鏡』、鴨長明や吉田兼好などの近古文が登場する。「高等女学校教授要目」に適った教科書であったといえよう。

35年秋、教科書会社普及舎の社長で元茨城県師範学校校長の山田禎三郎が列車内に手帳を置き忘れた。手帳には贈賄の相手の氏名・金額などが記されていた。同年12月17日の真夜中、一斉検挙が始まった。翌18日の『萬朝報』は、“17日午前2時頃、捜査当局は検事・警察官等100余動員し、金港堂、集英堂、普及舎の教科書肆や視学官など、教科書検定収賄事件に関する20余箇所を一斉家宅捜索した”などと報じた。この事件で、文部省官吏、府県知

事、師範学校校長、教諭、出版会社など教科書採択に関与した152名が検挙され、100名が一審で有罪となった。「教科書疑獄事件」である。

これをきっかけとして、36年4月、「小学校令」が一部改正され、教科書が検定制度から国定制度へと大きく転換した。しかし、奇怪なことに、事件摘発開始より3週間後の36年1月9日には、教科書国定化法案が閣議決定され、4月には国会を通過した。国会で国定化に反対した議員はごく少数であった。19年から設けられた小学校教科書の検定制度は、各道府県で採択が行われていた。そのため徐々に教科書出版会社と道府県の教科書審査委員との癒着が生まれ、たびたび新聞紙上で取り上げられるようになっていた。とはいえ、あまりにも手回しよく事が運ばれたため、国定化は以前より計画されており、教科書疑獄事件はその口実を与える目的で摘発されたのではないかという疑念が生じる。国定化に反対する出版社も、国定化を危惧する報道もほとんどなかった。37年国語・修身・日本歴史に始まり、43年の理科をもって小学校のすべての教科書が国定となり、昭和20年終戦まで政府の思惑通りの国民教育が進められていくことになる。

『新撰女子国文教科書』より以前、歌子は二つの教科書を手掛けている。一つは、華族女学校（18年11月開設）の生徒に和文の法則を理解させるための『和文教科書』（序文18年12月付）10巻である。部分的にしか残っていないが、1・2巻は『徒然草』、3巻は『十六夜日記』、9巻『土佐日記』、10巻『竹取物語』から抄出された。軍記物などは入っておらず、歌子が女子学生に最も教えたい平安・鎌倉時代の歌文中心であった。

もう一つは、20年秋に完成した『国文小学校読本』である。一の巻下では、欧化主義時代を反映して日本語と英語が併記された。た

とえば、「をとこ」の下に（Man）、「をんな」の下に（Woman）などである。歌子はこの読本を全国の小学校に採用させたかった。時の警視総監三島通庸（みしまみちつね）に口添えを頼んだ手紙が残っている。三島は5人の娘を桃夭学校と華族女学校に入学させていた。しかし、不採用になった。当時言文一致の運動が起こっていたにもかかわらず、二の巻以下が雅文体であったこと、英語の扱いが実情に合わなかったことなどが理由である。

この他にも歌子が深く関わった修身用の教科書『国のすがた』（20年3月出版）がある。実際の執筆は帝国大学文科大学教授、文部省編集局兼務の物集高見（もずめたかみ）で、三島が委嘱した。『国文小学校読本』や『国のすがた』の出版人が歌子の弟平尾錦蔵の名義になっている。錦蔵は大学予備門（後の第一高等学校）出身で、9年宮内省侍従試補として宮中に入ったが、16年辞任後は職を転々としていた。そんな弟の生計の確立を図ったのである。歌子が教科書編さんに意欲的だった理由の一つがここにあった。

39校の最も多くの高等女学校で採択された佐藤球校訂・明治書院編輯部編『改訂高等女子読本』は、日露戦争勝利後の39年1月に出版された。修身の「国体ヲ尊崇」「国法ニ遵フ」「義勇公ニ奉ス」の旨趣を反映する教材が配置されていた。こうして高等女学校の国語教育も「国体」の強化へ向かっていくのである。

参考文献

『下田歌子先生伝』故下田校長先生伝記編纂所　編集・発行
『学制百年史』文部省
『「読本」の研究　近代日本の女子教育』眞有澄香著
「国定教科書」国立公文書館・明治の学びⅣ
「教科書国定化の推移」文教大学教育研究所（文責：平沢茂）

戦後生徒会活動成立史の研究 ⑤
―生徒自治会の展開における軍政部の指導(2)―

猪股（いのまた）　大輝（だいき）（東京大学大学院）

前稿までの整理

前稿までに、本連載では以下のことを指摘した。すなわち、①生徒会の前身たる生徒自治会は1946年頃から設立が進んだこと、②設立にあたっては都道府県軍政部の強い関与があったこと、③その一例として、1948年頃に規約改正指導があったこと、の3点である。

また、前稿では、喜多の先行研究の不足点を指摘しつつ、生徒自治会の成立－展開において「実際にどのような資料が指導に際して提示されたのか、その際、指導を行っていた軍政部内部ではどのような情報共有がなされていたのか」を問題視すべきであると述べた。前稿では、こうした認識に従い、前者について、実際に生徒自治会指導に際して使用されたと考えられる規約案を紹介した。本稿では、前稿の指摘を引き継ぎ、後者の問題、すなわち、軍政部内部の生徒（自治）会指導に関する情報共有状況について、GHQ/SCAP文書の近畿民事局文書綴に残された、大阪軍政部教育担当課内の会議資料と見られる文書を用いて確認したい。

生徒（自治）会の現状への課題認識

今回用いる資料は、大阪軍政部教育課職員と見られる「コマキ」（Komaki）によって1948年9月に作成、報告された「生徒政府」（student government）という資料[1]である。同文書は、「アボット軍曹【Sgt. Abbott, 1947年1月から大阪軍政部教育課の「青年団・生徒自治会担当」、K. Abbottを指すと思われる[2]＝引用者注】によって、府内の、特に中学校及び高校に設立されてきた生徒会（student council）」の現状の課題、指導方針と今後の課題について報告したものである。

文書では、まず、府内の生徒会の課題について、次の4点をあげる。

1点目に、文書が指摘するのは、生徒会の組織に関する課題である。文書は、府内のほぼすべての生徒会が「不適切で、非効率的なシステム及び組織しか有していない」とした上で、こうした組織の一例を示す。文書によれば、いくつかの学校は、上院・下院からなる生徒議会（School Congress）を持ち、更に生徒政府（School Government）、生徒法廷（School Court）を持つなど、「複雑すぎる」(too complicated)機構を持ってしまっている。他方、幾つかの学校は、あまりに「簡素・貧相」(simple and poor)な組織しか持っていない。それは、ディベートクラブやディスカッショングループが生徒に対して、聞こえばかりよく糊塗された自らの考えを披露するためにのみ用いられている、と指摘される。

2点目に、生徒会に対する生徒の誤解の問題が取り上げられる。こうした誤解のうち、最も重大なものは、少数の生徒たちによって、生徒会は「労働組合」(labor union)と同様のものとして捉えられている点にある。そのように誤解する生徒たちは、学校が、軍人や官僚、資本家がそうするように、権利や自由を剥奪していると考えている。彼らはこの状態を反民主的だと考え、生徒会を、こうした抑圧を生む校長や教師の不正義と全体主義に対抗するための権威と考え、生徒組合（student union）を組織して、果ては、事務局の奪取まで試みているという。

3点目に、役員選挙の不徹底が指摘される。文書によれば、全体の90%に及ぶ学校で、役員を選出するための「総選挙」(general election)が行われておらず、選挙に際して「議会的手続き」（parliamentary procedure）は取られず、また、それに関する「規約」（constitution）も制定されていない、とする。

4点目に、生徒会と校友会の併存状態が指摘される。文書は、校友会組織は、校長を会長、教師を役員とする組織であり、この組織が生徒会と併存することによって、生徒会は、生徒の「課外活動」

(extra-curricular activities)に対して、何らの「権威」(jurisdiction)を持たなくなってしまっている、と報告する。

以上のような指摘を踏まえて、文書は、6つの指導方針と3つの今後の課題をあげる。やや長くなるが、文意明瞭のため、まとめて引用したい。まず、指導方針について。

a. 生徒会の機構は複雑過ぎても、あるいは単純すぎてもいけない。適切な組織とするべきである。なお、三権分立のシステムはこれをすすめない。〈後略＝引用者〉

b. 生徒会は教師に反抗するものではなく、教師とともに活動するものである。それゆえ、1名以上の生徒会顧問が選出されなくてはならない。

c. 生徒は未成年である。それゆえ、校内のいかなる問題にも責

任を有するところの校長の同意なくして最終決定を行うことは禁止される。権威と責任は常に同じ場所になくてはならない。それゆえ、校長は、最終的な権威として、生徒政府(student government)の規約に定まった位置を与えられねばならない。

d. 生徒会は、第一に教育的重要性の観点から評価されるべきであって、その実践的価値からではない。国家あるいは地方選挙と同様な方法で役員総選挙を行って初めて、それを保有することができる。〈後略＝引用者〉

e. 古いタイプの校友会は廃止され、生徒が会長と役員を務める生徒会に置き換えられねばならない。活動資金として、時代遅れで強制的な会費制をとることは避けたほうがよい。代わりに、彼らは、会計委員会と彼ら自身の議会（diet）の熟考を通して決定されたプランに従い、彼ら自身の活動－例えば演劇の上演、音楽公演、競技大会の開催等－を通じて、収益を挙げ予算を作るべきである。

f. 生徒集会の時間は、全ての学校において、毎週1校時以上設けられるべきである

次に、今後の課題について。

a. 税金の問題。生徒会に関して、彼ら自身の活動のために、入会金(admission fee)を徴収している場合がある。入会税(admission tax)は全員から徴収されており、利益も少ない。それゆえ、この代替案として、アクティビティパスシステムを提案している。【このシステムは＝引用者注】生徒と親が、一定量のお金を学期始めに生徒会の活動に対して寄付し、その量に応じて、生徒会の活動に参加可能なパスを与えるものである。〈後略＝引用者〉

b. いかに生徒会連合(federal association of student council)を設立するかに関する問題。【府内には＝引用者注】あまりにも多くの中学校、または高校があり、それらが異なるタイプ【生徒会組織の話か？＝引用者注】を有しているために、状況や場面に応じて全員が集まって会合を開く連合組織をいかに設立するか、という問題を解決できていない。

c. 教師や校長が生徒会と無関係である、という誤解が根強い。彼らは生徒会を「自治会」〈中略＝引用者〉と呼称し、もし校長に最高権力(supreme authority)があり、教師たちに生徒会を監督する権力(power)があるならば、彼らは生徒会に何らの重要性を見て取れないといっている。【このような状態が続けば＝引用者注】生徒たちは自主性(self-direction)と自発性(initiative)を失い、古いタイプの学校と違わない、無気力に陥ってしまうだろう

以上の指摘からは、軍政部が生徒(自治)会実践において、望ましい校長－教師－生徒関係を打ち立てることに苦慮する様子を見て

取れる。ここでいう「望ましい」関係とは、全員が適切に参加する生徒会が、校長の監督のもと、教師らと協調しよりよい学校づくりに参画していく、という関係性である。このうち、「全員が適切に参加する」ために求められているのが機構の改革や、会費制の廃止であり、「校長の監督のもと、教師らと協調」するために求められているのが、顧問制の確立や、生徒会組織における校長の権威の確立である。

また、もう一点注目すべきは、文書に表出する生徒会活動に対する軍政部の価値認識である。文書は、生徒会の価値が「教育的重要性」、すなわち、望ましい関係性に基づいて、よりよい学校づくりに参画する経験を得ることにあるとしており、生徒会という組織を通じて、生徒が学校経営のアクターとして現れる、という実践的価値は重視されていないのである。

以上のような課題認識や価値認識と相当に類似した考え方が、次稿以降で確認していく1949年文部省著作における「生徒会」論にも現れていく。このことは、本論で取り上げた文書に見られるような問題状況が全国各地に遍在していたことを示していると言えるだろう。では、その「生徒会」論とはなんだったのか、それらはどのように評価されるべきなのだろうか。この点を次稿以降の課題としていく。

注

———————————————————————————

1 GHQ/SCAP Records. Box No. 2957, Student Government. CAS(C) 04271, 国立国会図書館憲政資料室所蔵。なお、本稿において、同文書からの引用に関しては、注における指示を省略する。

2 阿部彰(1983),『戦後地方教育制度成立過程の研究』,p.32.

教育史研究のための大学アーカイブズガイド（21）
―国士舘史資料室―

田中（たなか）　智子（さとこ）（早稲田大学大学史資料センター）

今号では国士舘史資料室を取り上げる。同資料室は年史編纂と展示を主たる業務とする機関である。以下、その基本情報および所蔵資料について述べていく。

（1）基本情報

国士舘史資料室は、国士舘大学世田谷キャンパスの柴田会館内にある。その歴史は学校法人国士舘（以下、法人）の年史編纂事業と共にあり、1976年頃国士舘創立60周年ないし65周年を記念して年史編纂が計画され、図書館内に校史編纂資料室（史料編纂室）が設置されたことに始まる。しかし、この計画は完成を見ずに頓挫してしまい、その後は大学および同窓会が中心となって、創立者柴田徳次郎と国士舘の足跡を顕彰する出版事業を行った[1]。

そのような中、在職卒業生会から法人の沿革史編纂を目的に250万円の基金を寄付する動きがあった。法人はそれを受けて、創立70周年にあたる1987年に総務部企画調整室に国士舘資料室準備委員会を設け、89年、柴田会館内に沿革資料の展示をメインとした国士舘資料室を発足させた。資料室には運営委員会が置かれたものの、ほどなくして活動を停止した。運営委員会にかわって、92年より八十年史編纂委員会が組織され、資料調査・収集等の活動を行い、97年に『国士舘80年の歩み』を刊行した[2]。

2003年、法人は2017年の創立百周年に向けて、「徹底した記録史料調査と学術的研究成果にもとづく本格的な法人沿革史編纂を目指す『国士舘百年史』編纂計画」を立案し、国士舘百年史編纂

委員会を設置した。このとき、理事長室広報課に年史編纂室を設置し、事務担当とした[3]。こうして資料室の管理と年史編纂が別個の組織で行われるようになったのであるが、2009年、法人は体制を整備し事業を本格化させるため、国士舘資料室と年史編纂室とを統合し国士舘史資料室を設置した[4]。こうして年史編纂と展示の両方を主たる業務とする国士舘史資料室が誕生したのである。

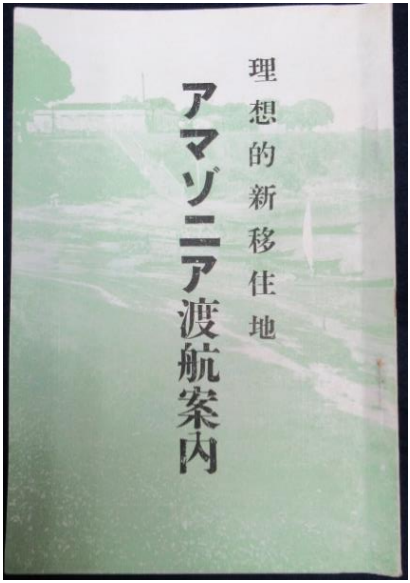
国士舘史資料室は現在、⑴百年史編纂事業の推進、⑵調査・収集、⑶整理・保存、⑷利用・公開の4つの業務を行っている。このうち⑷は①展示、②利用、③教育支援に分かれており、①は展示室における学園ゆかりの品々の公開、②は閲覧室における閲覧・レファレンスサービス、③は地域の中学生の職場体験学習や学部1年生の自校史教育への支援となっている[5]。

展示室【写真1】は、祝日・大学が定める休日等を除く月曜日から土曜日の10時から16時まで開室しており、誰でも自由に見学することができる。閲覧室は、祝日等を除く月曜日から金曜日の同時間帯に開室しているが、事前の利用予約と申請書の提出が必要である。（3）で述べる利用案内に従って、手続きをしていただきたい。

【写真1】展示室（柴田会舘4階）

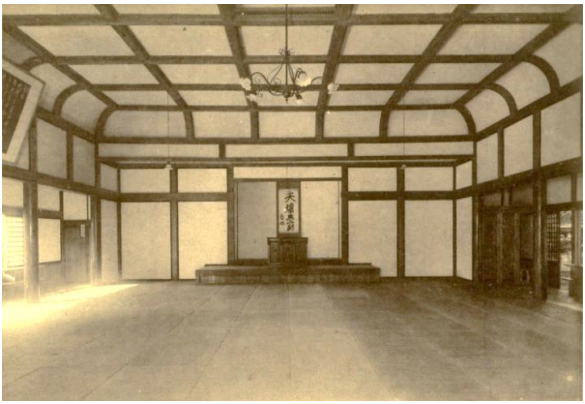
（2）資料紹介

国士舘史資料室所蔵資料のうち、法人文書等と写真資料の一部は、同資料室ホームページ内の「収蔵資料検索システム」で検索できる。このシステムにて検索可能な資料のうち、筆者が紹介したいのは以下の2点である。1点目は「理想的新移住地　アマゾニア渡航案内」である【写真2】。これは1930年4月に設置された、国士舘高等拓植学校[6]関係の資料の一つである。資料の表題が示す通り、同校はブラジル開拓移民を養成する学校であった。この時期、拓殖大学などアジア各地の植民地開拓のための教育を行う学校が存在したことはよく知られているが、南米移民、特にブラジル移民に特化した学校が存在したことはあまり知られていない。同資料は南米への移民政策・移民教育の一端を知るうえで貴重な資料である。



【写真2】「理想的新移住地　アマゾニア渡航案内」

2点目は、国士舘大講堂関係写真である。大講堂は1919年に世田谷に移転してきた当時の校舎の中で唯一現存するものである。講堂というと、洋風のホールを想像する人も多いと思うが、国士舘大講堂は写真の通り和風で畳敷きの床となっている。講堂内部は、現在はオープンキャンパス等を除き非公開となっているが、この写真資料群によって往時の講堂の様子を知ることができる。1942年



【写真3】「大講堂内部正面」（1942 年頃）

【写真4】現在の講堂内部

頃の講堂内部の写真【写真3】と現在の講堂内部【写真4】を見比べると、格天井など往時の様子とほぼ変わりないことがわかる。

（3）資料へのアクセス方法

（2）で述べた通り、国士舘史資料室の所蔵資料は同資料室ホームページ「収蔵資料検索システム」（下記）にて検索可能である。閲覧については、「閲覧室のご案内」のページ（下記）を参照のうえ、事前予約をしていただきたい。ただ、「収蔵資料検索システム」に登載されていない資料も多数存在するので、まずは下記連絡先に一度確認をしてみるとよいだろう。

また同室の展示については、前述の通り柴田会舘4階の展示室で日曜・祝日、その他大学が定める休業日を除く10時から16時まで開室しているので、ぜひ一度足を運んでみていただきたい。

TEL:03(3418)2691
FAX:03(3418)2694
E-mail:archives@kokushikan.ac.jp(代表)
収蔵資料検索システム:
https://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/database/system/
収蔵資料の閲覧等について(利用の手引き):
https://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/about/reading/

(つづく)

1 国士舘百年史編纂委員会「国士舘百年史編纂事業の現状と課題」(『国士舘史研究年報　楓原』創刊号、pp.9-10)
2 同前 pp.10-11
3 同前 p.13
4 同前 p.16
5 国士舘史資料室ホームページ「沿革と活動」(https://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/about/outline/)
6 国士舘高等拓植学校については、熊本好宏「国士舘高等拓植学校と移民教育」(『国士舘史研究年報　楓原』第3号)に詳しい。

学生寮の時代㉓

－同郷団体の「学生寮」－

金澤（かなざわ）　冬樹（ふゆき）（東京理科大学・事務職員）

●「学生寮」の定義と範囲

学生寮について考察する際、その定義や枠組みは必ずしも自明なものではない。現在「学生寮」と称している寮を眺めてみても、内実は様々である。例えば、現在多くの大学は、HPやパンフレットにおいて自大学専属の学生寮を紹介している。ただ、詳らかに見てみると、寮生が自治的に運営している「学生寮」もあれば、大学が積極的に運営に関与している「学生寮」、学生限定の賃貸アパートのような「学生寮」など、多様な姿を見出すことができるだろう。このような宿舎を「学生寮」と総称すると、「学生のみが住んでいる宿舎＝学生寮」というような曖昧な定義になりかねない。

もちろん、寮という名称の歴史的変遷を追えば、江戸時代以前の寺院や藩校などの宿舎に行き着くと考えられる【注1】。その変遷については別の機会に考察したいが、「学生寮」という定義や範囲を考える場合、実態としてどのような共通性を定めておくか、という課題がある。

試みに、現在運営されている「学生寮」について、設置者別に区分すると以下のような種類が見出される。

(1)学校
　大学、大学校、高等専門学校、高等学校、中等教育学校など
(2)団体
　同郷団体、奨学団体、宗教団体、山村留学団体など
(3)企業
　学生寮運営企業など

上記の種別で考えると、歴史的変遷や運営方法、設置者と寮生の関係など、多様な姿が見えてくるだろう。個別に分析してくことはもちろんであるが、多様な姿を見せる「学生寮」の全体像を踏まえ、定義や範囲、各寮の位置づけを考察していく必要がある。

●同郷団体の「学生寮」とは

上記の種別のうち、今回は同郷団体の「学生寮」について見てみたい。ここでいう同郷団体の「学生寮」とは、同郷出身者が中心となり開設した寮で、主要都市（特に東京）へ進学する学生の便宜を図るとともに、同郷出身者間の連携を目指した共同宿舎をいう。いわゆる「県人寮」である【注2】。

同郷団体の「学生寮」に関する先行研究は、数は多いとは言えないが、重要な蓄積がある。「学生寮」全体を扱ったものとしては、同郷者ネットワークや「故郷」などの観点から論じた成田や前田の研究がある【注3】。また、埼玉学生誘掖会寄宿舎を分析した高田の研究は、設置者の運営への関与、舎監や炊夫の動向、食事事情やスポーツ活動など、さまざまな角度で寮の実態を分析した貴重な作業である【注4】。また、寮出身者などの手により、各寮において寮史なども刊行されている【注5】。

ただ、高田が「研究対象として学生寮が検討されたことはこれまで少なかった。これは、教育史のなかではやはり学校が中心的なテーマとなるし、都市史でもさまざまなインフラ整備の歴史にむしろ関心が寄せられてきたためではないかと思われる」【注6】と述べているように、同郷団体の「学生寮」は十分に分析されていないのが現状である。

このような先行研究の状況ではあるが、同郷団体の「学生寮」は近代から今日に至るまで、学生の共同生活空間として、看過できない広がりを持っている。その重要性は、今日運営されている同郷団体の「学生寮」の数、その多くが今日なお寮生による自治的な運営を行っており、寮外の同郷出身者との結節点になっていることを見た時、改めて認識することができよう。次頁の【表】は今日運営されている同郷団体の「学生寮」の一部を、創立年順に掲出したものである。創立年のほか、部屋割りや運営方法、食事などの状況を一覧化した【注7】。

●どのように分析できるか

【表】における各寮の創立年を見ると、明治期に上京学生を対象として開設された寮や、第二次世界大戦後に開設された寮があることが分かる。創立状況についても、旧藩主家や同郷出身有力者の協力、地元における住民からの寄付など、多様な経緯がうかがわれる。また、寮生による自治的な運営については、寮運営の視点からも、殊に注目される点である。

これらの寮については、先述した高田の研究のように、寮ごとの分析を進めることで、地域や創立年代における共通点や相違点などが見えてくるだろう。史料については、各寮において保管されている可能性が高く、今後のアプローチ方法を検討する必要がある【注8】。

同郷団体の「学生寮」に関しては、他団体による学生寮と同様の分析を行うとともに、その特有性に注意を払う必要があるだろう。各地域に存在した藩校、若者組などにおける共同生活の「文化」が引き継がれた可能性なども、今後検討できるのではないだろうか【注9】。

【表】現在運営されている同郷団体の「学生寮」の一部

設置団体	寮名称	創立年	対象	定員(男)	定員(女)	部屋割り	運営	食事	風呂
(公社) 兵庫県育才会	尚志館	1875	兵庫県出身者	30	―	2人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 輔仁会	明倫学舎	1882	福井県出身者	50	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 南豫奨学会	南豫明倫館	1883	愛媛県出身者	40	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 久敬社	久敬社塾	1886	出身地不問	40	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 諏訪郷友会	長善館	1891	長野県出身者	40	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 信陽舎	信陽舎	1906	長野県出身者	30	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 鹿児島奨学会	同学舎	1906	鹿児島県 宮崎県(都城市)	30	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公社) 米沢有為会	東京興譲館寮	1907	置賜地方出身者	24	―	1人部屋	自治	朝夕	共有
(公財) 水戸育英会	水戸塾	1907	茨城県出身	50	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 群馬県育英会	学生寮上毛学舎	1909	群馬県出身者	120	80	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公社) 米沢有為会	仙台興譲館寮	1914	置賜地方出身者	15	―	1人部屋	自治	朝夕	共有
(公財) 千曲寮	千曲寮	1918	長野県出身者	35	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 信州学生協会	信濃寮	1920	長野県出身者	25	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 北海道在京学生後援会	北海寮	1933	北海道出身者	72	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 信濃育英会	信濃学寮	1933	長野県出身者	111	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 沖縄県国際交流・人材育成財団	南灯寮	1947	沖縄県出身者	50	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 湖国協会	湖国寮	1954	滋賀県出身者	90	50	2人部屋	自治	朝夕	個別
(公財) 富山県学生寮	青雲寮	1956	富山県出身者	70	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 福岡県教育文化奨学財団	学生会館(英彦寮)	1956	福岡県出身者	100	―	1人部屋	自治	朝夕	共用
(公財) 福岡県教育文化奨学財団	学生会館(筑紫寮)	1956	福岡県出身者	―	50	1人部屋	自治	朝夕	共用

≪注≫

【注1】江戸時代における「学生寮」については、本連載で取り上げたことがある。拙稿「学生寮の時代④―江戸時代の『学生寮』」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第13号 2016年。

【注2】「県人寮」については、正岡子規を事例に本連載で取り上げたことがある。拙稿「学生寮の時代⑨―正岡子規と『県人寮』」『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』第18号 2016年。

【注3】成田龍一『「故郷」という物語―都市空間の歴史学』吉川弘文館 1998年、前田俊一郎「都市における青年と故郷―寄宿舎・学生寮にみる同郷者結合を中心として」松崎憲三編『同郷者集団の民俗学的研究』岩田書院 2002年。

【注4】高田知和「近代日本における学生寮という空間」『渋沢研究』第18号 2006年、同「学生寮の生活史―食と賄方の観点から」日本生活学会『生活学論叢』13号 2008年、同「学生寮の生活世界―埼玉学生誘掖会寄宿舎に寄せて」公益財団法人渋沢栄一記念財団 渋沢資料館『学生寄宿舎の世界と渋沢栄一―埼玉学生誘掖会寄宿舎の誕生』2010年、同「学生寮の生活文化史―『同郷寄宿舎』の諸行事から」『生活文化史』第60号 2011年、同「同郷団体がつくった学生寮におけるスポーツ活動―明治・大正期における学生スポーツの一つのあり方」スポーツ史学会『スポーツ史研究』25号 2012年など。

【注5】関之『長善館物語―諏訪郷友会九十五周年・長善館九十年沿革史』財団法人諏訪郷友会 1981年、木下博民『南豫明倫館―僻遠の宇和島は在京教育環境をいかに構築したか』財団法人南豫奨学会 2003年、財団法人埼玉学生誘掖会100年史編集委員会編『財団法人埼玉学生誘掖会百年史―ある学生寮と寮生の青春譜』財団法人埼玉学生誘掖会2004年など。

【注6】前掲高田2011年 p18より。

【注7】各寮のHP、パンフレット、寮史を参考に作成した。

【注8】高田によると、埼玉学生誘掖会寄宿舎の史料については、「委員日誌を始めとした誘掖会の史料は長らく誘掖会によって所蔵されていたが2006年に財団法人渋沢栄一記念財団渋沢資料館に寄贈され、現在は同館所蔵となっている」と述べられており、史料の保管経緯が確認できる。前掲高田2008年 p16より。

【注9】例えば、各地域に存在した藩校、若者組などの共同生活の「文化」が引き継がれた可能性なども想定できるだろう。田嶋一「若者組と青年期教育」『教育学研究』第44巻第2号1977年など参照。

木下広次をめぐる史料（5）
―「大日本の教育に就て」（1）―

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

前回までは木下広次の教育観の手がかりを求めて、1899年の講演をもとに『武士時代』で1902年に公表された「国の維持力（明治三十二年二月十三日躬行会例会ニ於テ）」を検討してきた。この史料のなかで木下の教育観には、新たな集団である学生に対するに対して、教育を通して何らかのかたちで「武士道の注入喚起」をおこないたいという考えが含まれていたことが明らかになった。

これに関連した史料を7年程前に見つけていたことに気がついたので、紹介したい。国立国会図書館所蔵の『日本大家論集』第218集（1889年9月5日、博文館）に所収されている、大日本教育会において木下がおこなった「大日本の教育に就いて」という講演記録である。

講演のなかで木下は、「今暫く森大臣が生きて居られたならバ、此事が益々明白確実でありましたらうに、不幸にして中途に斃れ」と述べていることから、この講演が1889年の2月12日（森有礼の死）から9月（『日本大家論集』第218集刊行）までに行われたものであると推定できる。

木下は1888年8月に第一高等中学校の教頭に就任し、翌年の1889年5月に同校の校長となっている。したがって、この講演の時点では第一高等中学校の教頭または校長であったということになる。

以下、講演の前半部分を紹介する。このなかで木下は、明治の日本の教育では智育は発達しても徳育が成果を挙げていないこと、国家が設けた学校に必要な徳育は森有礼元文部大臣が述べるように「人と人との間に於て其規律を教ゆること」などを述べている。

森有礼からの依頼によって木下が第一高等中学校の教頭に就任したと、木下が1888年の教頭就任演説で述べている。この演説をみる限り、木下は森の「国家主義教育」を第一高等中学校において何らかの形で実施することを明確に意識していたと読み取ることができるだろう。

> 私が法学社会の末席に連なり、教育家の一部分に加ハつたのハ、昨年八月以来であります、私ハ教育のことにつきてハ、理論も知りませず、また経験も薄く、自ら教育者の間にあることを恥る位です、然るに今日此席に出たのハ、昨年以来私が、第一高等中学校に於て企てたことを教育家諸君に告げ、且つ諸君の説をも承りたいから、不肖を顧みず此席に出たのであります、固より今日来場の諸君ハ、教育ニ関係ある人が多く御座いませうけれども、中にハ関係のない人もあるやに見受けますから、私の述べるところで、諸君の了解せぬ処もありませうが、此段は預め御断り申します。
> 先づ私の述べる処ハ、地方若しくハ府下に於て、子弟を教育する人々に告ぐるのでありますが、私が申上げるのゝ善し悪しハ、此等の人より教育雑誌に投書するか、或ハ其他の方法を以て御教授を願ひたい、私が今日日本の教育上に於て観察するに、或る部分に於てハ大に進歩した処もあり、或ハ進歩せぬ処もあり、また多数の人で攻究するものもあり、或ハ攻究せぬ点もあるやに思ひます、而して其攻究の積み理屈の積んだのハ、総て智識上のことであつて、智識上に於てハ実に長足の進歩をなし、今日の有様で進むときハ、此の智育の一点に於てハ、手を下さずして其極点にす(ママ)達るだらうと思ハれる程であります、然るに茲に心配なのハ徳育であります、これを宗教家に問へバ、仏教にあれ耶蘇教にあれ、兎に角宗教でなければならぬと云ひ、其他種々の説もあります、乍併私ハ此の議論につきて其可否を茲に述べません、唯だ二三年以来稍々其方向を発見し、一個の目的の生じたと思ふのハ、故森大臣の極意であります、尤もこれハ社会多数に知れ渡つたものでないから、私ハ其説を茲に祖述します、即ち森大臣の説に拠れバ、宗教と国家の司る処の教育ハ、互に隔絶してあるもので、決して

密着したものでない、宗旨の信向ハ各自有すべきもので、其宗旨ハ種々あらうが、何に致せ一の信向心ハ、人に附着して居るもので、智識の伝達に従つて、其信向心の強くなるものハ当然である、故に数千万の人を相手とせる国家が、誰其ハ此の宗教を信じてハイケね、此の宗旨を信せよと云ふやうなことハ出来ない、左れバ国家が或る一の宗旨を指して、これハ真正の宗旨だと云へ得るものでなく詰まり国家ハ、人と人との関係について教を説くべきもので、彼我相互の規則を定め、斯くて始めて、宗旨と云ふものと、国家の教と云ふものゝ間に、分界が立つやうに思ハれる、故に国家が一国の子弟を集めて教ゆるのハ、如何なる方向を採らねバならぬかと云ふに、譬へば宗教の事なれバ、其家々の家則と云ふものもあり、人々者自身の意見もあるべく、各自如何なる宗教を信じても、更にこれを禁ずるところがなく、決して干渉すべきものでないけれども、此の人と人との間に於て其規律を教ゆることハ、国家の設けた学校の任としなくてハならない、故に人と人との間の教を充さゝる処の学校ハ、これを名けて国家の学校と云ふことが出来ない。斯く云ふ処のものハ森大臣の極意で、これよりして日本の教育上に於て、始めて国家と云ふ文字が現れるやうに思ハれる。故に今暫く森大臣が生きて居られたならバ、此事が益々明白確実でありましたらうに、不幸にして中途に斃れ、私共の如き今日国家の学校を預つて居るものハ、これについて最も困難を覚えます[1]。

では、木下はどのような方法で森の「国家主義教育」を実現しようと考えたのであろうか。次号で演説の後半を紹介しながら検討していきたい。

――――――――――――――――

1　木下広次「大日本の教育に就いて」(『日本大家論集』第218集、1889年9月5日、博文館)、9頁より11頁。

「久徴館」発足時の位置と規模

小宮山（こみやま）　道夫（みちお）（広島大学）

帝国大学大学院生早川千吉郎「久徴館同窓会開会ノ小言」によれば、久徴館は「明治十五年十月一日市ケ谷長泰寺ニ於テ始メテ其萌芽ヲ発」したもので、わずか「八名ノ寄宿生ヲ以テ之レヲ組織シ」て「各自逓番爨炊ニ当リ併セテ雑事ヲ負担」「費用ヲ節減シ以テ大ニ志操ヲ堅クスルヲ得タ」ものという。

市ケ谷長泰寺は現在も市ヶ谷にある。開山は約500年前のことで、現在の千代田区麹町三番町の近辺にあったものが、三代将軍家光の時代に市ヶ谷に移転したという。その理由としては「尾張家の上屋敷に隣接しておりましたが、これは、いざ戦というときに、武士の兵舎として活用するという意図があったからではないかといわれて」いるようである。明治になって尾張屋敷を士官学校に転用した際、土地が足りないため長泰寺周辺の寺院は杉並区に移転したが長泰寺は留まったと「鳳仙山長泰寺」のWEBの「沿革」に記載されている(http://www.sotozen-navi.com/detail/article_130141_1.html)。ここにいう移転した寺院とは、江戸期に長泰寺の近隣にあり、現在は杉並区にある宗泰院（次頁古地図での表記は「宗泰寺」)(https://www.city.suginami.tokyo.jp/kyouiku/bunkazai/hyouji/1007927.html)、長龍寺(https://www.

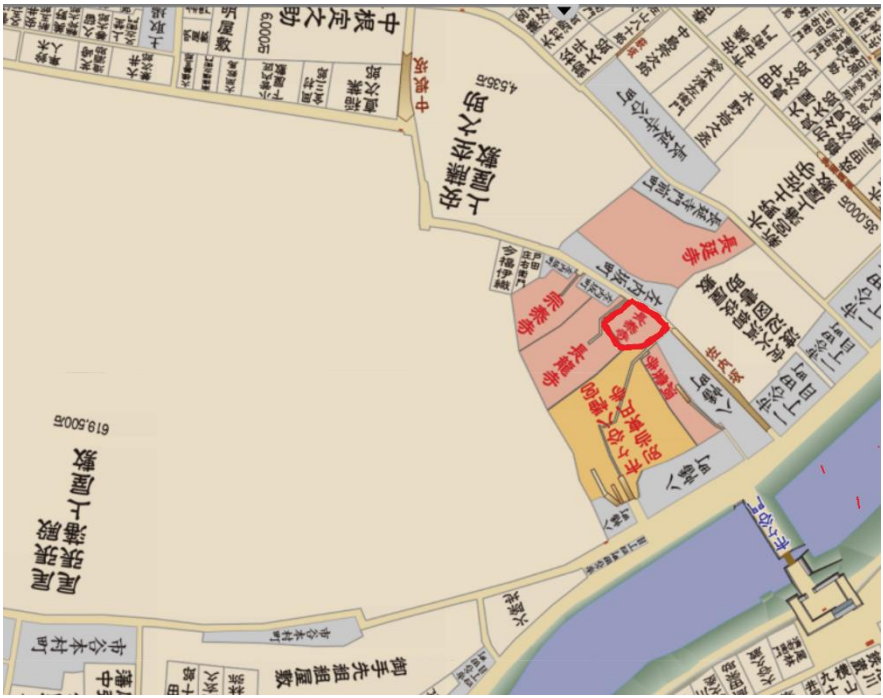


図 1　嘉永年間の長泰寺周辺

朱線で囲った場所が長泰寺境内。寺の東南にあたる図の右下には市ヶ谷門が見える。長泰寺の北側には長延寺の寺領が、西側には宗泰寺と長龍寺の寺領、そして尾張藩上屋敷が広がる。南側にみえる市ヶ谷八幡宮別当東円寺と洞雲寺は現在もほぼ同じ位置にあるが、神仏分離により別当東円寺は廃寺となり市谷亀岡八幡宮となっている（出典：「タイムワープ MAP・東京」(http://labs.mapfan.com/etc/kochizu/)）

city.suginami.tokyo.jp/kyouiku/bunkazai/hyouji/1007926.html)、長延寺(https://www.city.suginami.tokyo.jp/kyouiku/bunkazai/hyouji/1008022.html)の３寺を指すものと思われる。各寺院の解説を読むといずれも1909(明治42)年の陸軍士官学校の校地拡張時に買収されたと記されている。因みに長泰寺を含めいずれも曹洞宗の寺院である。

長泰寺の檀家は場所柄尾張家縁故の武家が多かったとされており、近代に入って何故に加能越三州の学生たちが寄留するに至ったかは推し量ることができない。

久徴館は「十九年春育英社ニ属シタル以来益其規模ヲ大ニシ吾加能越学生ノ寄宿所トナシ大ニ学事ノ便利ヲ計レリ」とある。この「育英社」とは現在の公益財団法人加越能育英社である。日本最古の民間育英事業団体であると同社のWEBには記載されている(http://meirin.or.jp/foundation/)。育英社は「1879(明治12)年に旧加賀藩士の出資によって設立された」と記載されているので、長泰寺に有志八名が寄宿し始めた当時も育英社は存在していたことになるが、当時は両者の間に関連は無かったようである。それが4年の歳月を経て育英社に組み込まれることとなった。順次人が増えて加越能の学生の寄宿先として公認される存在となったと理解すれば良いのであろうか。「吾加能越地方ノ為メハ勿論家国ノ為メニモ亦多少ノ報恩ヲナ」すことが当初からの変わらぬ目的として掲げられていたこともその公認に影響していたのかも知れない。

久徴館の胎動から数えて6年弱、育英社の管理となってから2年の間で「本館ニ寄宿シタル者ハ前後三百名以上ニ達ス」とあるので、単純計算で年間50人前後の寄宿生が久徴館で生活していたものと理解できる。前掲の古地図で確認する限り900㎡に満たない長泰寺の敷地である。早川の文章では久徴館の成立・移転について明示的ではないが、長泰寺時代はなかなかに窮屈であったものと思われる。文京区西片町会の開設する情報サイト「西片町会」に掲載されている「西片の年表」(http://nishikata.blogspot.com/

2013/04/blog-post_7184.html)によれば、1885(明治18)年に「久徴館新築(加賀藩学生寮。館長桜井錠二。28年廃止)」とある。当時の駒込西片町に新築された久徴館に関する記事である(同様の記述が平井聖「大名屋敷跡地の住宅地形成に関する研究－木郷西片町の場合－」(住宅総合研究財団『研究年報』No.22,pp.201-211,1995年)の202頁に年表としてまとめられている)。長泰寺が手狭になって移転したものと思われるが、早川の文章を信頼すればこの移転新築には育英社は関与していないことになる。このあたりの事情については未詳であるが、いずれにせよ久徴館はこの時期に急速に規模が拡大した点は注目しておきたい。そして新築からわずか10年で寄宿舎としての幕を下ろすことになるのである。

（続く）

体験的文献紹介(6)

― 漢学塾の調査研究に入る ―

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

国立大学はじめ有力私大に教育学専修の大学院が次々に開かれたためか、1954年頃から日本教育学会が活発化した。学会に北海道、東北、関東、中部、関西、中国四国、九州の支部ができ、各支部が研究発表会を開くようになった。1954年10月、宇都宮大学で第2回関東教育学会が開かれた。私は修士論文の一部を手直しして「能楽稽古法の変遷」と題する発表を行った。次いで55年8月、北海道大学で行われた第14回日本教育学会で「教育上よりみた幽玄と花と一水」を発表、同年10月には第3回関東教育学会・群馬大学で「猿楽座の組織と教育」を発表、都合3回にわたって猿楽能の稽古、教育法を口頭発表したのである。私の口頭発表に対する反応はゼロであった。質問もなければ批評らしきものもない。他の発表者のような議論は全く起らなかった。発表の多くは欧米の教育思想か藩校、郷校、寺子屋の調査報告、または明治の教育制度の初歩的研究であった。また戦後のカリキュラム改造運動もあり、関東教育学会では日本教職員組合の教科研究系の授業改革に関する発表もみられた。日本中世の芸能教育などは教育学会発表になじまないものだと思い知らされた。

河野先生邸宅での漢文素読と早稲田大学の漢文講読には必ず出席して勉強した。河野先生の素読は『大学』『中庸』を終り、『論語』にさしかかっていた。本文はもとより朱注もすみずみまで読むもので苦しかったが、次第に面白くなった。区切り所までくると『史記』

に移る。音吐朗々たる先生の口調をまねて読み下すのだが、非常に楽しかった。漢文流独特のリズムを次第に会得した。或る一篇が読み終わった日、または年末のある日、先生は奥様に命じて夕食を整えさせる。一献を傾けながら私を相手に放談されるのを楽しまれた。先生は旧幕臣の家柄で東京生まれ、お父上が士族の商法で没落し、少年の頃、小田原の親戚に預けられたが逃げ帰った。或る裕福な知人が学資を出してくれたので、早稲田中学校から早稲田の高等師範部を卒業し、それから東京帝国大学の支那哲学科に入ったのである。その間、小田原でも東京でも漢学塾に入って漢文と英語を学んだ。それを先生は懐かしくも楽しそうによく語ってくれた。明治の末年まで漢文英語を教える漢学塾というものが各地にあったらしい。佐藤紅緑の少年熱血小説にも貧しい少年に漢文と英語を教える素性の知れない、しかし学識の高い老学者が出てくる。河野先生は“教育史をやるなら明治の漢学塾を研究してみないか”と言われた。“中世能役者の稽古”が教育学会で反応がなく無視され続けたのに落胆していた私は一条の燭光を見る想いであった。

早稲田大学での大矢根先生の漢文購読は三年目に入り、テキストは『詩経集注』(中華民国華美書局出版)であった。第一巻国風の「関関雎鳩　在河之州　窈窕淑女　君子好逑」から朱注を含めて読み始めた。そんな或る日、東洋文化研究所で漢文講読を始めるから希望者は来るようにと言われた。東洋文化研究所は日中戦争最中の総理大臣・平沼騏一郎の元邸宅で新宿駅の東方、明治通り沿いにあった。漢籍を中心に平沼蔵書の無窮会図書館と併置された漢文学の研究所である。幕末維新期の儒者・安井息軒の学統を継ぐとされた大東文化大学の漢学の教授を中心に都内の有力な漢学者がここで漢文講読会を開いていた。大矢根先生はここで『世説

新語』を講読された。毎週土曜日4時から、丁度、早稲田の講読が終るあと続いて始まるので私はこの講読会に参加した。『世説新語』は六朝時代の貴族たちの逸話集で、朱子学のような固さはなく高尚ではあるがシャレたところがあって文学の面白さを堪能させてくれた。

東洋文化研究所の面白い所は、時折、私どもが知らない、俗世間から離れてしまったような老大家にお出で願って講釈を聞くことである。研究所のお座敷がその講堂になったこともあるし、お茶の水の聖堂がその会場になったこともある。2時間ほど正座して聴聞するうちに百年ほど前にタイムスリップして儒者の講釈もこうであったかと想った。

古式の講釈はわれわれの講読会の隣の座敷からも聞こえてきた。望楠学派（南朝正統を主張する国体主義者）の松本洪先生の講釈である。短躯白髪赭顔の先生は羽織袴姿で現れて音吐朗々と講釈される。襖をへだてて、その美声はわれわれに聞こえた。十年前、1945年8月15日の終戦の詔勅の原文を書いたのは松本洪先生であるとされていた。極東軍事裁判でA級戦犯として終身刑に処せられ服役中になくなった平沼騏一郎は終戦時の枢密院議長であった。望楠学派の松本洪先生は平沼議長のブレーンの一人であった。そうしたこともあったであろう。私は往年の漢学者や漢学塾を彷彿と想像できるようになった。

東洋文化研究所と併置する平沼蔵書の無窮会図書館はまさに漢籍の宝庫であった。漢学者の伝記もあったので書庫の係りに頼んだら貸して貰えるようになった。私が漢学者の伝記について質問するものだから書庫係りのその老人が、“このような書庫の係りの者が集って雑談する会があるから一度来てみないか”と誘われた。その

会は岩崎財閥の静嘉堂文庫や加賀前田家の尊経閣文庫、東京書籍の東書文庫などの私設文庫の係りの私的な集りであった。別に司会者もなく渋茶をすすり、煎餅をかじりながらぼそぼそ話す。みな風采のあがらない老人であるが、話す内容は頗る高級で書誌に通じていた。大学教授ばかりが知識人だと思っていた私は、このような薄暗い書庫の一室に書誌に通じた大家（たいか）がいたのかと社会の奥深さを知った。この人々から幕末明治期の漢学者の伝記や直筆の書類を教えて貰った私は全国の漢学者漢学塾の調査にとりかかった。多くの伝記を教示されたが、まず竹林貫一『漢学者伝記集成』、小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』、関義直『近世漢学者著述目録大成』等によってしらみつぶしに漢学者の調査をはじめたのである。学者が塾を開くことを「帷（い）を下（くだ）す」と言う。伝記にはこの「下帷」の言葉がよくでてくるが、一体どんな所に塾を開き、何時ごろ、どのように教えるのだろう。“授業料をとるのだろうか”などの疑問が湧いた。書庫係りの老人の会で聞いてみた。ある一人がそれは明治初期の新聞に私塾の広告がでているからそれを見るとよいと、こともなげに言った。明治初期の新聞は東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫にあるという。私の以後数年に及ぶ明治新聞雑誌文庫通いはこれから始まるのである。

今回、私がとくにご紹介したいのは、金沢大学資料館がネットで一般公開している資料アーカイブのなかの、第四高等学校の「三々塾誌」（1942～1947年、金沢大学資料館蔵（四高同窓会旧蔵））の一節です。

http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=17

資料館のアーカイブサイトでは、「三々塾関係資料」（16件）として、塾生らの写真やアルバムとともに、貴重な当時の三々塾の「塾日誌」も画像公開されています。皆さんもぜひ資料をご覧いただければ幸いです。

私はかつて『金沢大学五十年史　通史編』(1999年)所収で、「昭和戦前期の第四高等学校」として「軍事化をめぐる動き」(133～141頁)という項目を執筆しましたが、その際に同上に挙げた三々塾誌などを資料的に十分に活用できなかったという残念な記憶が今もあります。お江戸の仇は長崎であってもはらしたい・・という研究者の特有気質もあるのか、その時点では資料的に活用できなかったという自身の思いを持ち続け、またいつか機会あれば一矢を報いたい！と、研究者としては考えているわけです。まことに往生際が悪い質なのでしょうが。

同サイトの画像公開されている「三々塾誌」は3点あり、1点は1903～1927年の塾誌で石川四高記念文化交流館蔵（四高同窓会旧蔵）、1点は1912～1928年の塾誌で金沢大学資料館蔵（四高同窓会旧蔵）、そして1点が1942～1947年の塾誌で金沢大学資料館蔵（四高同窓会旧蔵）と記録されています。とくに最後に挙げた塾誌は、私としても先の事情などからやはり注目したいと思います。

同上塾誌の戦局下の一節には、「昭和十九年八月十一日　二年生富山日本マグネシュウム工業ニ出動、三年生ハ五月末川崎航空岐阜工場ニ出動中ニテ本日ヨリ塾生ハ一年生二名ノミトナル。三々塾苦境時代来ル」として、「ココニ於テ塾生ハ僅カ二名トナリ四十有余年ノ歴史ヲ有スル我ガ三々塾ハ一大危殆ニ直面ス」と切実に記されています。塾生らで真剣に「懇談」するなかで、「塾ヲ飽ク迄モ存続セシメントスル点」は一致しながらも、その方策案として「理科生ヲ入塾セシメ定員ヲ充サン」や、「下宿ノ形態ニ改メ」組織改組してはどうかなど挙がりますが、「何レモ採ル能ハズ我等ハ三々塾ノ伝統ト理念ヲ失ハレントスルヲ最モ怖ル、理念ナキ塾ノ存続ハ無ニ等シ」と決します。しかし、同年9月には残された1年生2名もまた、笹津にある日本マグネシウム富山工場へ勤労動員することになるわけです。同塾誌には、「ここに三々塾は全員挙げてひたすら生産力増強のためにペンを棄てたのであつた。この間金井　早川　坂野　三君入隊され、ここに彼等の武運長久を切に祈るものである。笹津の生活、それは私［鈴木清］にとつて自己反省の機会を与へてくれ

たといふ意味に於て極めて有意義なものであった」とし、動員中に葛藤を重ねながらも「私［鈴木］は悩み苦しんだ。そして私は一つの暗示を得たのである。それは『素直な勤労心』である。素直なとは又積極的とも言へる」と見い出し、「之こそ今の私を救つてくれる唯一のものである」とその心情を綴っています。（谷本）

元寮生の友人に教えてもらって山岡淳一郎『生きのびるマンション』（岩波新書、2019年）を手にとった。分譲マンションでは約30年のスパンでは大規模補修や建替の問題を住民自身の手で解決しなくてはならない事態が生じること、そして、住民間の私的自由を尊重しながらどのような共同体をつくっていくのかがポイントとなることなどが書かれている。読みながら、「自治」は様々なところで問われていると改めて感じている。（冨岡）

会員消息

私の単著（2018年2月、成文堂）に対して、全国地方教育史学会『地方教育史研究』39号（2018年5月、評:小宮山道夫さん）や日本教育学会『教育学研究』86巻1号（2019年3月、評:伊藤彰浩氏）の書評に加えて、神戸大学教育学会『研究論叢』25号（2019年6月、紹介:惟任泰裕氏）や教育史学会『日本の教育史学』62集（2019年10月、紹介:田中智子さん）の図書紹介などを、ご丁寧にも指摘していただきました。たとえば、惟任氏は「さらに深く知りたいと思うことがら」として、「金沢の『学都意識』がどのように形づくられ、どのように地域社会に浸透していったのかをより詳しく知りたい。さらに言えば、そのような『学都意識』は県下の初等・中等教育にどのような影響を及ぼしたのか、都市計画とはどのような関連があったのか、県内外からの『学都認識』はどうであったのか、それは受験生の進路選択にどのような影響を与えたのかといった点において、さらなる好奇心を喚起された」と挙げています。また田中さんは「地域社会と国立大学の問題を考えるうえで重要なヒント」となるであろう、「第四高等学校・金沢医科大学・金沢高等工業学校・金沢高等師範学校という、設置目的も背景も異なる高等教育機関が一つの総合大学となるとき、どのような議論が繰り広げられ、どのような問題がおこったのか、あるいはおこらなかったのか」という「戦後の出発点」をきちんと解明しておくことが重要と指摘しています。加えて、田中さんは「学校の設置や統廃合に反対する動きがなかったのか」とし、「誘致活動だけでなく反対論や廃止論も踏まえることで、問題の本質の部分がより鮮明に見えてくるのではないか」と重要な点を強調されています。同上の惟任氏や田中さんらの言及などについては、公刊した著者としてたいへんありがたくもあり、研究上の課題や新たな研究視角などを改めて確認することができたのではないかと考えています。（谷本）

今号より、ニューズレター会員として執筆することになりました、クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパスで教員をしております八田友和（はったともかず）と申します。専門は、生涯教育学・社会科教育学・博物館教育学です。本ニューズレターでは、学校資料に焦点をあて、原稿を執筆していこうと考えております。今後とも、よろしくお願いします。(八田)

八田友和さんが、本号から会員として参加してくださることになり、第53号に読者投稿していただいたコラム「学校資料の教材化を模索して」のテーマが連載記事となります。本号記事では学校資料をめぐる大学との連携についての展望も記されています。

秋は教育史学会をはじめ様々な催しがあって、スケジュールがタイトですが、出会いも多く、楽しいですね。みなさんにも良い収穫がありますように。 (冨岡)

仲間内で続けている読書会で、今回はトクヴィル『アメリカのデモクラシー』（岩波文庫、全4巻）を読んでいます。デモクラシーにおける「自治」の役割に刮目しています。（金澤）

夏の間に受け入れた短期留学生の成績評価をはじめとする事後処理が完全に終わらぬまま後期に突入してしまいました。合間を縫って無理して参加した静岡大学での教育史学会は良い刺激となり研究の楽しさを再確認した反面、史料の扱いや会場での発問・受け答えのあり方など、時代の変化に戸惑いを感じさせられました。皆多忙なのですね。

（小宮山）

前号のコラムにも書いた女子野球の話。10月6日に自宅近くの所沢航空公園野球場で開催された女子プロ野球秋季リーグ戦を観戦してきました。スタンドは結構埋まっていましたが、大部分は招待された地元少年野球チームメンバーとその関係者たち…大丈夫かな?と思っていたら、つい先日、経営難から所属選手の約半数が退団するとのショッキングなニュースが入ってきました。

女子野球を盛り上げるため、「逆転の発想」で10年前に結成された女子プロ野球リーグ…実際にその後、アマチュアの女子野球チームは増加傾向にあります。その火を絶やさないため、これからも女子プロ野球への支援を続けていきたいと思います。（田中智子）